

令和6年度横須賀市精神保健福祉連絡協議会会議録

- ・ 日 時 令和7年2月18日（火）午後3時00分～午後4時30分
- ・ 出席者 行實志都子、小倉盛崇、中野浩志、島田玲子、北岡岳人、中村玲子、重城眞知子、仁井眞紀子、柏美樹、内田由紀、下江秀雄、中島大昌、中島真由美、小菅俊彦（敬称略）
- ・ オブザーバー 赤池敏夫、山崎辰夫、平田はる奈、
- ・ 事務局 大内泰之：保健所保健予防課主査
太田久美子：保健所保健予防課
知念亮：保健所保健予防課

1 開 会 あいさつ 保健所長 土田賢一

2 自己紹介 欠席者 木村充、後藤健一、八橋貴樹、福本雄一

3 座長選出 柏構成員の推薦により、行實構成員が座長に選出された。

4 議 事

行實座長

議事（1）精神保健福祉の状況について事務局へ報告を求めた。

事務局

資料1に基づき報告をした。

行實座長

この件について、質問はあるか。

小菅構成員

資料1について一つ補足をさせていただく。事務局より1年以上の長期入院者が減ってきていると話があったが、横浜市と比較すると横浜市の令和5年精神科入院患者の入院者は4188人、うち1年以上の長期入院患者は2236人で横須賀市の約10倍となっている。

人口10万人当たり長期入院患者は、横浜市が59.6人、本市が55.1人となっており、本市の方が長期入院患者の割合が少ない状況である。

行實座長

追浜のすぎもとクリニックが閉院したが、近くの医療機関である湘南病院に何か変化はあったか。

中野構成員

多少の患者は来ている。

行實座長

精神科病院の長期入院患者の実情はいかがか。

小倉構成員

精神科長期入院患者は高齢者が多く、介護が必要となってくる。グループホームや特別養護老人ホーム、認知症病棟に案内する方が増えている印象である。

行實座長

長期入院患者の状況についてだが、コロナ禍の影響で全国的に退院がストップしていたというデータがある。そのため、コロナが落ち着いたとはいえ、精神科病院を含めた医療機関への外部の出入りは、以前のようにスムーズにはいかない環境が続いている。

全国的には少しずつコロナが落ち着き、こころの支援の部分では元に戻りつつある。しかし、コロナの影響で一時的に下火になった支援を再び盛り上げるために、多くの努力がなされている状況だ。

また、小倉構成員が述べたように、長期入院で高齢者の割合が増えているため、どのように退院を進めていくかという問題が大きい。この問題に対しても真剣に考える必要がある。

中野構成員

高齢になると、どのように進めていくのが良いのか考える時がある。コストの問題も浮上してくる。グループホームに関しても、受け入れが難しい場合がある。

資料1で示されている横須賀市内の福祉施設の事業所数の推移を見ると、グループホームの数が令和5年から令和6年にかけて約30件増えていることに驚かされる。これは、月に2~3件のペースで増えていることになる。入居者がどこから来ているのか、市内なのか市外なのか、また年齢層はどうなっているのか非常に興味深いところである。

重城構成員

グループホームを管理している者だが、令和6年の86件という数字は、法人の数を

指しているのか。昨年の時点で約115の事業所があると聞いていたため、どんどん増えていると感じている。どのような内容で運営されているのか不明な部分が多いので、情報があれば知りたい。

小菅構成員

障害者福祉の手引き（資料）から出している。本日細かな資料がないため後日回答したい。

※障害者福祉の手引き（資料）より 令和7年3月1日時点

グループホーム事業所数 132件（精神：88、身体：18 知的：123）

柏構成員

グループホームについては、重城構成員が述べたように、株式会社がフランチャイズでグループホームの設立パッケージを進出している実態がある。グループホームと日中活動が抱き合わせになっており、同じ会社の中で昼間は作業所に通うセットになっている。夜はグループホームに帰り、バスで送迎するという形での施設数は増えている。実際に利用しているのは、意外と地元よりも市外の方が多く、横浜市や県外から来ていたり、地方から入院し、そのまま横須賀に住むというケースが増えている。そのため、支給決定が横須賀市ではない場合も多く、相談事業所は対応を細かくしていると聞いている。三浦市では一斉に5か所がオープンしたが、三浦市内の方は1人も入居せず、知的障害のあるお子さんを持つお母さんたちが求めているものとは異なり、ミスマッチが生じている印象がある。

行實座長

グループホームが増えているという状況がよく見受けられる。フランチャイズ形式で運営されているグループホームの中には、病気の特徴をほとんど理解しないまま進められている場合がある。結果、人員を受け入れた後に対応が分からず問題が発生し、問題が起こると入所者を突然追い出すことがあると言われており、それによって家族や本人が困る状況が生まれている。グループホーム自体は良いものであるため、どこまで機能を持たせ、どのように育てていくかが私たちの大きな課題である。

平田オブザーバー

グループホームの話題には関心が高い。私は鎌倉市の事業所に所属しているが、横須賀市に次々とグループホームがオープンしているので非常に羨ましい。鎌倉市は土地価格が高く、新規の設立が難しい状況にある。

鎌倉市にも熱心に運営されているグループホームが多く存在するが、最近見学に訪れた横須賀市のグループホームは非常におしゃれで綺麗であり、生活の質を考える

と利用者がそこに喜んで決める理由がわかる。

しかしながら、支援のクオリティについては不明瞭な部分がある。見学をした施設は熱心に運営されていたが、柏構成員が述べたように株式会社の運営では、時に心配な点がある可能性がある。特にセルフプランが多いと聞いており、これがさらなる不安を招いている。おそらく医療機関のソーシャルワーカーがしっかりとフォローしている実態も存在するかもしれない。

一方で、鎌倉市には最近オープンしたグループホームがあるものの、地元の評判はあまり良くなく、紹介することが難しいと感じていた。その結果、横須賀市で利用者が埋まっている状況を見受ける。先日、その管理者が亡くなったことで、横須賀市の利用者が困っているという話も耳にした。

鎌倉市内のグループホームで問題が起きていても、支給決定が横須賀市だと鎌倉市の行政や事業所がそれを把握できていないという残念な状態である。地元グループホームがあっても地元は実態が把握しにくい。

鎌倉市近辺で問題が起きていても、鎌倉市の事業所や行政が把握できていないという残念な状態である。そうした事情により、地元グループホームがあっても実態が把握しにくい。法改正により、令和7年度からグループホームには地域連携推進会議の定期開催が義務付けられた。これにより、グループホームは地域に積極的に開かれることが求められる。外部の関係機関を招き入れ、外部の視点を取り入れつつ内部をしっかりと見せることが法律で義務付けられている。

地域の支援者もグループホームにしっかり関わり、応援し、見守る体制を整えていかななくてはならないと考えている。

下江構成員

資料1によれば、横須賀市のグループホーム数だけでなく、定員も相当増加している。65歳以上の長期入院者が多いという状況に対し、これがどの程度反映され体制が整っているのか。

重城構成員

聞くとところによると、高齢者の受け入れをあまり行わない施設が多く、若い人を受け入れているという話をよく聞く。ある施設では、比較的自立している人を入所させる傾向があり、地域で暮らせるのではないかと思うような人が入っている例もあるとのことだ。実際にその施設を見て確認したわけではないが、他の施設で受け入れが困難な人が、私の施設に来ることが多いのが実情である。

中村構成員

はまゆうは長い歴史を持ち、高齢者の利用者も多い。時折、ご両親が亡くなり一人暮らしになることで生活に支障が出始め、グループホームに3人ほど入居した。入

居まで大変だった。高齢になれば介護の方どうかと言われてしまう。精神疾患を持つ方の中には、介護が必要な段階ではない方もいる。はまゆうに来てからは作業をきちんと行い、グループホームで皆と過ごし、生活の質を向上させている。例えば、以前は週に一度しかお風呂に入れなかったが、今は毎日入るようになった方もいる。重城構成員が述べたように、手がかかることは当然であり、そうした方を受け入れる施設が少ない。今後、利用者のためにグループホームを探すことは一層難しくなるのではないかと考えている。

行實座長

情報提供に感謝したい。高齢者の長期入院者に対する支援として、グループホームがあるとよいと思う。

行實座長

議事（２）精神障害にも対応した地域包括ケアシステムの取組み状況について事務局へ報告を求めた。

事務局

資料２に基づき報告をした。

行實座長

今回、コア会議に久里浜障害者支援センターゆんるりの北岡構成員が参加されたとのことであるが、一言コメントをお願いしたい。

北岡構成員

今事務局から報告があったように、第2回実務者会議では、異なる立場の者同士が相互理解していくことを目標に意見交換を行った。事前にコアメンバーでどのように進めるべきかを考えた。

私は市内の相談支援センターで相談を行っており、横須賀市の自立支援協議会の中に課題整理部会があり、そこでCSV（グループスーパービジョン）を毎月行っている。市内の相談事業所20ヶ所から約50名が集まり、スーパービジョンを通じて事例検討を行っている。さまざまな情報や関係機関との横の繋がりが生まれる機会となっており、これを応用できればと、コアメンバーと話し合った。

事例については、コアメンバー内で事例を提供していただき、様々な意見が出るような仕掛けを考え、各事業所の特色や機能がうまく発揮されるよう工夫した。

私は自立支援協議会のGSVにも参加しており、今回の実務者会議に参加したが、目的は同じではないかと考える。地域課題の充実やその課題への取り組み方など、重なる部分があると思うため、自立支援協議会と合同で実施できるものがあるかもし

れないと感じた。

行實座長

議題2について、質問はあるか。

立場の違う者同士がお互いの違いを知ることや、自立支援協議会と共通する課題を認識することは重要である。今後、これらを踏まえてコラボレーションや連携を進めていくことが大切である。

行實座長

議事(3)神奈川県入院者訪問支援事業について事務局と平田オブザーバーへ報告を求めた。

事務局

神奈川県入院者訪問支援事業は、令和6年度については神奈川県によって横須賀市を含む地域で本事業が展開されている。入院者訪問支援事業の目的は、精神科病院に入院している方、特に外部との面会交流が途絶えがちな医療保護入院の市長同意者に対し、孤独感や自尊心の低下を解消することである。具体的には、病院訪問を通じて入院者の体験や気持ちを丁寧に聴き、入院中の生活に関する相談や情報提供を行っている。この事業は県の障害福祉圏域の6つの相談支援事業所に委託して実施されており、本市では鎌倉市にある地域生活サポートセンターとらいむが担当している。令和6年4月から医療機関への説明や訪問支援員養成研修が実施され、令和6年10月に事業が開始された。今回、オブザーバーとして地域サポートセンターとらいむの平田氏が出席しており、事業についての報告が行われる予定である。

平田オブザーバー

資料4に基づき報告をした。

年度当初に担当圏内県対象病院全てを訪問し、本事業の説明を行った。出席した先生方はじめ病院職員の方々には大変お世話になり、感謝している。特に貴重だったのは、病院のトップである院長や副院長から、現場のソーシャルワーカーや看護部長まで多職種の方が一堂に会し、行政と事業者も交えて直接意見交換ができたことである。このような機会を持てたことは非常に意義深いと感じた。

令和6年秋から事業が開始したが、予想以上に対象者が集まらなかった。そこで県と話し合いを重ね、市長同意による医療保護入院以外にも対象を拡大した。また当初一人1回までの訪問となっていたが、複数回可能となった。待っているだけでは集まらないため、病院へ連絡を行い病院ソーシャルワーカーと連携することで、対象者からの依頼が少しずつ入るようになった。実際に事業を実施し、傾聴の難しさを感じた。来年度も本事業をぜひ継続して取り組んでいきたいと考えている。皆様

のお力添えを引き続きいただきながら、さらなる努力を重ねていきたい。
また、県の委託を受け実施しているもう一つの事業、地域移行地域定着支援事業について、ピアサポーターの中島構成員からお話をさせていただく。

中島（大）構成員

ピアサポーターとして活動している。地域移行地域定着支援事業の中で、ピアサポーターは、精神科病院を訪問し、自分の病気の経験や地域生活に関する情報を共有することで、患者が退院後の地域社会での生活をイメージしやすくし、意欲を高め、地域の支援者と繋がりやすくする活動をしている。具体的な取り組みとしては、各病院のデイケアに参加し、患者との交流を深め、退院支援に繋げる活動を行っている。新たな試みとして、長期入院中の患者に外部の景色や情報を届けることに取り組んでいる。病棟に閉じ込められた環境で、外の風景やその変化に興味を持つ患者が多いため、ピアサポーターが撮影した写真や旅行記をスライドショー形式で共有し、彼らの意欲を向上させ、地域社会での生活への思いを強めてもらっている。オーストラリアではピアサポーターが国家資格として認められているように、ベルギーなどのヨーロッパ諸国でも精神科病院の数が減少し、地域での生活を促進している。日本でもピアサポーターをもっと活用してほしいと考えている。

行實座長

この件について、質問はあるか。
入院者訪問支援事業は、患者の権利擁護を目的に始まったってことの事業である。
患者が孤立感を解消して地域に繋がることも期待されている。入院者訪問支援事業は神奈川県による事業であり、今回はオブザーバーとして神奈川県精神保健福祉センターの赤池様が出席している。ぜひ、県の立場から話いただければと考えている。

赤池オブザーバー

日頃から神奈川県の精神保健福祉事業にご協力をいただいていることに感謝申し上げます。入院者訪問支援事業については、今年度の事業展開のスケジュールとして、上半期に7月と8月に訪問支援員の養成研修を実施した。下半期の10月下旬から訪問支援員の派遣を行い、10月と1月に実務担当者会議で意見交換を行った。12月の段階では、実績がまだ十分に上がっていなかったため、面会交流が困難な方というくりは維持しつつ、対象者の入院形態を限定しない形とした。次年度については、今年度と同様のスケジュールで進める予定である。県の実務担当者会議では、訪問回数が1回では信頼関係の構築に限界があるとの意見が出ており、複数回の訪問が求められている。そのため、来年度は一人に対して複数回訪問できるような予算措置を行い、さらなる事業の充実を図る予定である。地域の皆様には引き続き

きお力添えをいただきたいと考えている。

行實座長

複数回訪問可能となると、皆にとってよいのではないか。

行實座長

議事（４）その他で構成員に全体を通じての意見を募った。

行實座長

当事者の立場から、地域で生活する際の課題として、ピアサポーターである中島（大）構成員から意見や考えを伺いたい。

中島（大）構成員

私事ではあるが、2020年に新型コロナウイルスの影響により、父親がうつ病になった。ヘルパーやデイサービス、宅配弁当の利用、ケアマネージャーのサポートも受けているが、介護用ベッドの搬入にあたり、部屋の家具を大きく整理しベッドを設置するために、社会資源を活用した。自分一人では解決が難しい問題も、社会資源を利用することで乗り越えられた。現在、父がうつ病である中、私は月1回の送迎や内科受診の付き添いを行っている。社会資源を活用することで、精神障害者でも地域で暮らすことができるという手ごたえを感じた。一人っ子として父親と二人暮らしであるが、できるという確信がある。こういった経験を基に、今後、各病院を訪問して経験を伝えていきたいと考えている。

行實座長

大事なポイントをお伝えいただけたと思う。社会支援をどのように利用するのか、そして社会資源とどう繋がっていくのかを知ることが、非常に重要であると感じる。これを多くの方に理解していただくことが、地域での生活をサポートするための鍵となる。

その他の意見を募った。

下江構成員

神奈川県内の重度障害者医療費助成の実施状況について、NPO法人神奈川県精神保健福祉家族連合会がまとめた資料を配布した。これは身体・知的・精神障害に関する助成の状況を示している。鎌倉市は制度が充実しているが、精神障害に関しては他の障害と同じサービスを受けられない現状がある。横浜市の福祉計画では、障害者自立生活アシスタント事業が充実しており、その中には生活支援センターが含まれ、特に一人暮らしの障害者をサポートしている。知的障害には20カ所、精神障

害には17カ所、高機能障害には14カ所、発達障害に関する施設も設けられている。これにより、独身の障害者が安心して生活できる支援が整備されている。これらの施設は食事や洗濯、風呂などの生活面をサポートし、訪問支援も行う。横須賀では精神の相談支援事業所が1カ所しかなく、障害別に利用できる場所が最低でも3カ所は必要であるという希望がある。横須賀の長期入院者の半数以上が65歳以上である。多くの65歳以上の人々は自宅に帰ることが難しく、地域で生活したいという希望はありながらも、サポートが不足しているというのが現状である。

中島（大）構成員

私は実際の当事者としての視点から述べる。私は16年間、鎌倉市の病院に通院している。そこでの実情だが、医療費助成について鎌倉市が2級まで医療費を助成することは非常に素晴らしい。しかし、実際には医学の発達により3級の人が多い。そのため、2級までしか医療費助成がないことに対する不満が鎌倉市でよく取り上げられる。比較して、横須賀市では1級が5000円、2級が4000円、3級が3000円の助成があり、より公平に見える。このため、鎌倉市で3級に該当する方々からは、横須賀市の制度の方が良いのではないかとの意見が出ている。

行實座長

精神障害のある方が地域でどのように生活しやすくなるかがポイントである。ただし、予算には限りがあるため、それをどのように工夫して活用するかが重要である。

内田構成員

神奈川県司法書士会では、入院中の方に対して司法書士が無料で法律相談を行う事業を実施している。入院の方が自ら司法書士事務所に会いに行くことが難しいため、こちらから訪問して相談を行うことにした事業である。初回相談は無料であるが、2回目以降は実費が発生する可能性がある。また、運用については改善の余地がある。詳細については、神奈川県司法書士会のホームページに相談フォームがあるため、ぜひアクセスして確認いただきたい。

山崎オブザーバー

横三圏域ナビゲーションで今年度から精神障害者にも対応した地域包括ケアシステムについての取り組みを始めた。これまで、圏域の自立支援協議会では精神障害者に関する話題はほとんど取り上げられておらず、県に意見を伝えるための道筋を作ることを目指している。今年度は鎌倉保健事務所、三崎センター、横須賀に出向き、圏域でどのように取り組むかについて検討を開始した。当法人では主に知的障害者を対応しているため、私の知識不足を補うために皆様から多くの話を伺い、圏域での取り組み方法を検討している。次年度以降も圏域の自立支援協議会でこの

話ができるように取り組みをさせていただきたいと考えている。

柏構成員

他都市とサービスの充実度を比較しがちではあるが、実際のグループホームの支給決定数はまだ半分以下であり、他市からの利用も考えられる。増えてもニーズにマッチしていないこともあるため、どんなサービスがあれば満足するかではなく、希望している人の満足度を考慮し、適した場所やサービスを探すことが必要である。横須賀市内で完結しないことが出てくるため、圏域ナビゲーションセンターが存在し、三浦、横須賀、逗子、葉山、鎌倉で情報共有を行う。これは、少し遠くの市でも本人に適した場所を提供するためである。広域的には、横須賀の自立支援協議会の相談支援部会で GSV を通じてニーズを拾い上げている。精神障害に特化した部分でも他の会議で相談を行い、今後は個別ニーズを拾い上げ、それをグループホームや事業所に提案する段階としている。このような協議会や精神保健福祉士を活用し、様々な意見を発信することで、本人に合った暮らし方が提供されたらと思う。

行實座長

活発な意見交換に感謝する。

精神障害にも対応した包括ケアシステムの視点で情報交換が非常に重要であるのではないだろうか。

横須賀という町が抱える問題や取り組み、そして住みたい場所や条件についての個々の意思決定が重要である。

障害があるかどうかに関わらず、人はこういった町に住みたいという思いがある。それを叶えるために、どういった街づくりを行うかがにも包括としてとても重要なところなんではないか。今日のような皆さんのネットワークがなければ、それを実現することは難しい。

今回、新たに入院者訪問事業が導入され、様々な取り組みが進んでいる。来年度を見据え、意見交換を通じて住みやすい街をみんな考えていきたい。引き続き、皆様の積極的な支援をお願いしたい。

5 閉 会

※この議事録は、構成員等の発言を事務局において要点筆記したものです。